

## 佳作

### 未来まで筆を走らせる

岩手県奥州市立前沢中学校

3年 佐藤 愛徠

心地よい風の吹く小学3年生の春。夢を持たせてくれた習字を、私はそんな季節から始めた。

当時、字には少しばかり自信があった私は、もっと字を上達させて普段の生活に生かしたい、と思っていた。そこで父に勧められたのが習字教室。見学に行ったとき、どの生徒も集中して一画一画丁寧に文字を練習していた。自然と興味がわき、私も書道を頑張りたいという気持ちになった。

早速、私は習字教室に通い始めた。最初は筆の持ち方や運び方などが覚えられず、苦戦することが多かった。しかし、うまく字が書けたときの達成感、先生にほめられたときの喜びがあり、それがやりがいにつながった。

習字には段級位がある。私の習っている習字教室では、生徒部であると、一番下の10級から最上の8段まで位が存在している。中学校を卒業するまでには8段を取っておきたいと考えた私。まずは級を上げることから意識して取り組んだ。月ごとに違った課題のお手本が配られる。先生から字を書くときのポイントを教わって、それらに気をつけながらゆっくり丁寧に筆を運んだ。また、お手本をよく見て書くことで、自分の苦手な点やはね、はらいなどに気づくことができた。教わったことと自分の気づきを入れながら一文字一文字書くと、少しずつでも級が上がっていくことを実感した。

そして、習字を始めてから数カ月後。私は「文墨祭」に作品を出品することになった。私の住んでいる地域の神社で行われるコンクールである。当然、同じ学校の友人、同級生とも競うことになるため、より一層負けたくない気持ちが強かった。同時に、実力を試す良いチャンスだとも思った。書いた文字は、「上下」だ。「上」と「下」のそれぞれの縦線を合わせ、バランス良く書くことを考えながら一生懸命練習した。その結果、私は金賞を手に入れることができたのだ。先生から直接報告されたとき、心の底からうれしさがあふれてきたのを覚えている。この出来事が自信となり、その後も数々のコンクールに出品した。自分なりの練習方法を貫いて、たくさん入賞を重ねることができた。そして、級から段にまで成長した。

だが、学年が上がっていくにつれ、納得のいく結果を出せることが少なくなってきた。特に中学生になると、書体が変化したり、文字数が増加したりする。自分の取りたかった賞を逃してしまうことも多くあった。それでも、その悔し

さをばねにし、何度も書き直して仕上がったとき、改めて習字を続けていて良かったと思えた。全てをひっくるめて、書道の楽しさが感じられるようになった。

中学1年生の3月、教室に通い始めて約4年となりやっと準8段。いよいよ昇段試験を受けられるレベルにまで成長した。試験は課題が出されるが、手本なしの状態を受けることとなっている。習ってきたことを存分に生かしていくことが合格の鍵になると感じた。これまでの喜びや悔しさを筆にのせて、私は最後の画までいきいきとした字を書くことができた。

その後、生徒部8段に合格し、今は成人部で特待生として書道を続けている。習字を続けて学んだことは、常に努力していくことの大切さだ。「千里の道も一歩から」というように、着実な努力を続けていくことで大きな成果を得た。自分から時間を見つけて練習を重ねていくことが重要であると考え。さらに、見つけたり、感じたりした課題点を次に生かす大切さも学んだと思う。たとえ今、良い作品が書けなかったとしても、どの部分が自分は苦手なのかを理解する。そうした上で、課題点を意識しながら次に書くことでより良いものを作り上げることができるのだ。

私は将来、習字の先生になりたいと考えている。そのために、学んだことを活用して、さらなる技術の向上を図っていきたい。加えて、これからの子どもたちに、習字で得られる喜びや悔しさ、そして楽しさを味わってほしい。最近、パソコンを使用することで字を書く機会が減少している。だからこそ、筆を使って文字を書くということは価値があるのではないか。そんな習字の魅力を広く発信したい。その夢がかなうまで、これからも人生という道に、筆を走らせ続けたいと思う。